



Title	19世紀後半のリヨンの絹織物におけるジャポニスム
Author(s)	広瀬, 緑
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53068
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19世紀後半のリヨンの絹織物におけるジャポニスム

広瀬 緑

はじめに

19世紀後半のヨーロッパでは、日本の絵画や工芸品などをもとに日本の図案やモチーフ、あるいは表現方法を取り入れた作品が作られ、ジャポニスムと呼ばれる動きが芸術界に押し寄せていた。これ以前にも日本の美術工芸品は中国やオランダを經由してヨーロッパに紹介されていたが19世紀後半にはかつてないほど貿易が拡大し、万国博覧会も開催されるなど日本の美術が一般の人々の目に直接触れる機会が増えたため、その拡がり方も大きいものであった。このジャポニスムの現象は絵画の他、工芸や染織、音楽、写真など広範にわたっており、フランスの染織品においては、おおまかに流れをみると、綿製品のミュルーズにおける製作活動と絹織物のリヨンでの活動に分けることができる。1850年代の後半には既にドイツとフランスの国境地であるミュルーズで日本的なモチーフの綿製品が日本への輸出用として生産されており、そのための下絵も描かれていた¹⁾。その後1870年代の終わり頃からは絹織物の産地であるリヨンにおいても日本的な製品が作られていた²⁾。本研究では、このような製作活動のために手本となる日本の図案がどのような経路でフランスへもたらされたのか、またこのことがフランスの染織品にどのような意味を与えるものであったのかを考察し、当時のフランスの染織の動きの一つをジャポニスムという観点から考えていきたい。

1) 1889年のパリ万国博覧会と1894年のリヨン万国博覧会の織物出品物について
1889年のパリ万国博覧会へのリヨンの織物出品物の特徴は、素材においては、染めと織りを組み合わせた新しい織物技術が現れたことがあげられる。またデザイン面においては、特に菊の花など自然の草花をモチーフにしたものが多く見受けられる点にあると言える。このことは、それ以前のリヨンの豪華な紋織とはかなり趣の違ったものであった。出品物の中には、それまでのように王室の室内装飾のためや僧侶のためのもばかりではなく、ドレス用としてパリのデザイナー、ウォルトのために製作したのもあって、当時の服飾にこれらの草花モチーフの織物が使用されていたことがわかっている³⁾。

さらに、その後の1894年に開催されたりヨン万国博覧会でも、やはりいくつかの日本的な要素をもつ織物が出品されている点が特徴となっている。モチーフにおいては、菊や燕など日本的なものと言えるものが採用されているが、その表現法においては、遠近感のあるヨーロッパ的な空間表現を用いたり、いっそう写実を極めるなど、根底に流れる基本的な精神は西洋の伝統的なものとなっており、日本のものの模倣とは全く違った、しかし和洋折衷的な不思議な織物が製作された。このように、わずか5年の間に二つの万国博覧会の出品物において、リヨンの織物は特にデザイン面においての変化が顕著になっていった。

2) 日本とリヨンの交流について

さて、二つの万国博覧会の出品物のデザインが変化したことについて、1894年のリヨン万国博覧会の段階では、リヨンのデザイナーたちはいくつかの日本の織物製品を直接見て、日本のデザインや原理を研究することが可能であったものと思われる。それには、まず京都から合計3回の織物伝習生がリヨンへ渡っていること、そしてその後、京都や横浜の染織業者が1889年のパリ万国博覧会に織物を出品していること、そしてそれらの製品は織り方を調べるためにリヨンの商工会議所などが買い取ったことなどから推察することができる。

3) ミュルーズからリヨンへのデザイン伝播について

1850年代にはミュルーズにおいて日本のモチーフを採用した綿製品が、日本への輸出用として製作されており、これらは日本人の好みを考慮して、全く日本製品の模倣から始まっていた。しかし、この地は1870年の普仏戦争によってドイツに割譲され、製作活動はしだいに衰退していった。

一方、リヨンでは美術学校の生徒たちが単調な織物デザイナーよりも画家になることを望む傾向にあったので、デザイナーが不足する時にはミュルーズのデザイナーにデザインを依頼することがあった⁴⁾。それにミュルーズのデザイナーも花のデザインの点でリヨンを注目して戦争が始まる前からしばしばリヨンを訪れていた⁵⁾。このようなことからこの二つの都市の間で日本の図案に関する情報が行き来していた可能性は考えられる。

結 び

以上のようにミュルーズ、リヨンにおいて日本的なテキスタイル製品が製作されたことを万国博覧会の出品物を中心に見てきたわけだが、絵画におけるジャポニスムと違って、非常に産業に結びついた分野であるため生糸貿易や当時の服飾、とりわけウォルトとの関係なども絡んで独自の展開をみせていると言える。特にリヨンは中世以来、長く伝統的に王室のための豪華な絹織物を作ってきたわけだが、フランス革命によってその需要に大きな打撃を受けた。そして生産方針としては大衆化の道へ進んだのだが、その第一歩がジャカードによる大量生産といった技術革新であった。この発明は複雑な織りを可能にしたため、次にはデザインのことが考慮されなければならなかった。ちょうどそういった時代背景のところへ日本のデザインを取り入れる機会があったと考えられる。それまでのリヨンの豪華な紋織が1870年代頃からしだいに全く違うものへと変化し、日本的なものが現れている状況を考えると、リヨンのデザイナーにとって日本のデザインを採用することはリヨンの産業の生き残りを賭けた選択であったのではないかと考えている。

- 1) 「ジャポニスム展」図録 国立西洋美術館 1988年 pp. 159-162
- 2) Gazette des Beaux-Arts, décembre 1878, p.934
- 3) Bibliothèque des Arts Décoratifs, Paris, Collection Maciet, album 21-66, Modes, année (1894)
- 4) 「リヨン染織美術館」学研 昭和56年 p. 235
- 5) 「リヨン派の栄光展」図録 岐阜県美術館 1990年 p. 55

ひろせ・みどり
京都工芸繊維大学大学院博士後期課程学生
1993. 3. 6 理論分科会